# 福知山公立大学　2017年度　卒業式・学位授与式　式辞

本日、ここに福知山公立大学を卒業され、学士の学位を取得された21名のみなさん、おめでとうございます。ご家族ご親族の方々にも心からお慶びを申し上げます。また、大橋一夫福知山市長様をはじめ、ご臨席賜りましたご来賓各位に厚く御礼申し上げます。開式にあたり、本学が新たに制定した学歌・応援歌を初めて披露してくださいました福知山混声合唱団の方々、その指揮のためにわざわざ京都からお越しくださった作曲者の平野一郎先生に、この場をお借りして心からお礼申し上げます。

卒業生のみなさんは、ご家族・ご親族だけでなく、これら多くの地域の方々やここに参列している本学教職員たちに支えられ､祝福されて今日の日を迎えられたことを深く心に刻んでおいてください。

みなさんは旧成美大学に入学して福知山公立大学の第２回卒業生として学生生活を終えられました。在学中に公立大学への転換について充分な情報を得られず、説明も受けず、不安に陥ったこともあったでしょう。その責任の一端は私たち大学側にあったことを率直に認め、お詫びします。同時に、不安を乗り越えて今日を迎えられたみなさんの努力に敬意を表します。

ところで、みなさんは3月24日がどんな日か知っていますか。

昨年ＮＨＫの朝の番組で『ひよっこ』というドラマ（朝ドラ）がありました。1960年代のいわゆる「集団就職」で東京に出てきた少女の奮闘ぶりを描いたものでした。今から50年前、中学を卒業したばかりの少年少女たちが「金のたまご」と期待されて、高度経済成長真っただ中の東京に集団で就職した時代がありました。これは自由な就職活動というより、間に職業安定所が関係していて、条件の良い企業には都市部出身者が当てられて、地方の出身者には労働条件の悪い中小・零細企業がまず紹介されていました。もっとも、それでも、当時は最初の低い賃金も10年の間に４倍にもなるというのがこの時代でした。

1954年4月5日15時33分、中学生を乗せた列車が青森を出発して東京・上野に着きました。集団就職列車第１号です。２年後には専用列車となりましたが、その最後の集団就職列車が盛岡駅を出て上野を目指したのが1975年3月24日だったのです。なお、集団就職というと東北地方から東京へというイメージで語られますが、九州・四国や山陰地方からが多かったようです。

1950年代の中学から高校への進学率は50％前後、大学進学率は15％程度です。それに比べて、みなさんの時代の高校進学率は90％を超えており、大学進学率も45～50％近くになっています。それでも、さまざまな事情からみなさんと同世代の二人に一人は大学には行けず、高校を出て社会人として働いています。大学を卒業したみなさんは大学で学び獲得した力を充分に生かして、そういう同世代の人びとと力を合わせ、働いていく義務と責任があるということです。このことを片時も忘れないでください。

ただ、みなさんの今後は決して楽ではないでしょう。集団就職時代の高度経済成長はすでに夢のまた夢です。賃金が10年間で４倍に増えることなどあり得ないどころか、職そのものが不安定で、安定した人生設計などは到底建てられないかも知れません。それでも不安に閉じこもってはいけません。

「希望とは、もともとあるものともいえぬし、ないものともいえない。」と言い、「うしろをふり向く必要はない。あなたの前には、いくらでも道があるのだから」と言ったのは中国の作家魯迅です。魯迅はこうも言っています。「青年時代に悲観してはいけません。徹底的に戦うのです」。

この言葉をみなさんに贈って私の式辞とします。みなさん、ごきげんよう。

２０１８年３月２４日

福知山公立大学長　井口和起